

二冊の手記を通して見た二世像

— モニカ・ソネの *Nisei Daughter* とジム・ヨシダの
The Two Worlds of Jim Yoshida から —

坂 口 博 一

《作者達の周辺》

この二つの手記の作者達は、期せずしてほぼ同じ年代に、全く同一の地域であるシヤトルのスキドロウ（Skidrow は Skid Road の訛である）で育っている。ジム・ヨシダは1921年の7月生まれと自分の手記で述べているが、モニカ・ソネはその手記で、兄のヘンリーが1918年1月に生まれ、自分は第一次大戦終結（1918年）のすぐ後に続いて生まれたとしているから、おそらく1919年の生まれであろう。スキドロウは、シヤトルでいちばん港や海岸に近い本通りの西端で、日系人を含めた移民の多い地域でもあった。始めに“期せずして”という言葉を使ったが、一世達のアメリカ入国が、1900年を皮切りに、1924年東洋人の入国を禁止する法案の成立によって、日本人の入国が禁止されるまでのごく短い期間であったことを考えれば、その子供である二世達の年代が、極めて近いのは驚くに当たらないのかも知れない。又一世達が、働いてある程度の金をためて事業を始める場所は、アメリカ西海岸の限られた都市の日系人町に集中したから、たまたま数少ない二世の手記の作者同志が、同じ地域の出身であってもさほど奇異なことでもあるまい。まして小説や詩は言うに及ばず手記のたぐいも、ある程度その地に住みついた日系人達の間で生活が安定し、独自の文化と

いえるほどのものができあがって始めて生れてくることを考えれば、アメリカ本土で日系人が最も長い文化活動をほこり今もその中心地であるシヤトルで、この二つの手記が現れたことは、むしろ当然のことかもしれない。ちなみに最大の日系人作家ジョン・オカダもシヤトルの出身である。

モニカ・ソネとジム・ヨシダは、おそらく子供の頃顔見知りであったと思われる。二人の手記に共に、アメリカの小学校を終えた後で、同じ日本語学校に通っていた記述があるからである。ただ二人は小学校とハイスクールは異にしている。二つの手記に親しかった友人達の名前が数多くあがっているが、お互いにその中に二人の名前を見ることはできない。2才の年齢差もあるし、同じ地域に住んでいても、いわゆる遊び仲間だったとは考えられない。両家の交渉もそう親しいものではなかったであろう。当時は8,500人のシヤトルの日系移民同志の間で、同県出身者のみで親しくする傾向があった。モニカの父母は共に茨城県人であったが、ジムの父母は共に山口県人であった。モニカの父は安い部屋を移民や港湾労働者に借すホテル業者だが、ジムの父も理髪業のかたわら妻と共に同じくホテル業にもはげんでいた。モニカは父の親しかった同業者の名前を何人かあげているが、その中にヨシダの名は見当らない。どの程度に二人や両家が親しかったかは別にして、二人が同時代に同じような環境の中で育ったことは、二人の手記の幼年期から小学校時代の思い出をよく似通ったものになっている。

《モニカ・ソネ》

モニカ・ソネのソネは結婚後の姓で、旧姓をオリイといい、日本名はカズコである。シヤトルの海岸ばたで、当時のアメリカ人の子供達と何のかわりもないのびのびとした生活を送っている。ただ学校ではアメリカの子供達と席を同じくしても、帰宅してから一緒に遊ぶのは二世達ばかりであった。又居住地が港のすぐそばであったから、港につきものの船員、港湾

労働者、移民やそれを取りまく人々のけんか、飲酒、売春、行き倒れといったものは子供の時から目にして育った。彼女の手記を通して見られる、あまり物事に動じないでいつもほほえみを浮かべてものを見つめられる態度は、このような環境で養われたのかも知れない。それと、彼女の小学校からハイスクールを通して特に注目したいのは、二世につきものの正規のアメリカの学校教育と日本語学校との二重教育を受けている点である。モニカは、その経験を手記の中で次のように述べている。

Nihon Gakko was so different from grammar school. I found myself switching my personality back and forth daily like a chameleon. At Bailey Gatzert School I was a jumping, screaming, roustabout Yankee, but at the stroke of three when the school bell rang and doors burst open everywhere, spewing out pupils like jelly beans from a broken bag, I suddenly became a modest, faltering, earnest little Japanese girl with a small, timid voice. I trudged down a steep hill and climbed up another steep hill to Nihon Gakko with other black-haired boys and girls. On the playground, we behaved cautiously. Whenever we spied a teacher within bowing distance, we hissed at each other to stop the game, put our feet neatly together, slid our hands down to our knees and bowed slowly and sanctimoniously. In just the proper, moderate tone, putting in every ounce of respect, we chanted, "Konichi-wa, sensei. Good day."

このような異なった文化にはさまれて暮らす二重性の衝突は学校だけでなく、日本人の両親と暮らす家庭生活でもままたったであろう。ただ、アメリカ人の家庭とほとんど没交渉であった日系人の家庭で、二世達は正規の学校と日本語学校のように比較する対象もないまま、家庭生活は自分達が経験しているようなものがそうだとして素直にうけとめていた。モニカが日系人社会を抜けて普通のアメリカ社会と接するのは、ハイスクール後ビジネス・スクールを終えて、結核にかかり家庭をはなれてサナトリウムでアメリカ人と共に療養生活を送るようになってからである。ところで、モニカは小学校時代、家族全員で日本を1926年4月から8月半ばにかけて

訪問し、祖父母の家に滞在して、日光や東京に遊んでいる。その間、弟ケンジを疫痢で失う不幸にも見舞われている。彼女のハイスクールからビジネススクール時代にかけて、日本の中国侵略で、日米関係は悪化の一路をたどるが、アメリカ人の日系人を見る目が日に日にきびしくなる中で、モニカはいやでも自分が日本人の血を引いているのだと思い知らされるいくつかの出来事に遭遇している。そして第二次世界大戦の開始である。真珠湾の奇襲攻撃はアメリカの怒りを、ドイツやイタリアに対してよりも日本に対して強いものにした。西海岸は、もともと東洋系移民を極度に排斥した土地柄であったのに加えて、対日戦の軍事基地となったことで、身分が日本人である一世はもちろんアメリカ市民権を持つ二世も全員、数箇所日本人キャンプを作って、そこに収容された。モニカは父母と兄ヘンリー妹スミコと共に、仮収容所を経てアイダホ州ミニドカのキャンプに収容された。真珠湾は“ただただ悪夢であってほしい”と願ったモニカも、家族共々キャンプに収容されれば、自分達の運命を嘆いている前に、与えられた条件のなかで、より良い生活を求めていかなければならない。モニカはビジネススクールの出身であることが幸いして、収容所の高官の秘書として働くが、家族全員がたった一間で暮らさなければならないキャンプの暮らしは、シヤトルの暮らしとは雲泥の相違である。そのうち戦局が進んで、二世の男子は参戦を求められキャンプを去る。1943年には、二世は身元引受人があればキャンプを出てもよいことになる（ただし西海岸—カリフォルニア・オレゴン・ワシントン—への移住は許されなかった）。労働力不足をかこつ東部大都市では、日系人に対する過酷な扱いに対する反省もあって、宗教団体など身元引受人のなり手は多くあった。モニカもシカゴの牧師リチャードソン氏に引きとられ、歯科医の助手として働くが、そこからさらにリチャードソン氏の紹介でインディアナ州のウエンデル大学に奨学金を得て進む。ウエンデル大学で、やっと帰ってきた平和な生活に加えて、

さらに未来に向けて自分の希望をふくらませる。彼女の手記は、ここで終わっており、1953年に初めて出版されている。1979年版の新しい序によると、彼女はウエンデル大学から、さらにウェスタン・リザーヴ大学に進み臨床心理学を専攻し、第二次大戦のベテランである同じ二世のゲーリー・ソネと結婚して、現在四児の母となり一人の孫の祖母でもあり、オハイオ州のカントンに住んでいることを告げている。

《ジム・ヨシダ》

モニカ・ソネが、第二次大戦中キャンプに収容されるという事件も含めて、典型的な西海岸育ちの二世の境遇をたどって現在に至っているのに対して、ジム・ヨシダは二世として数奇な運命をたどったといえる。幼少の頃から、体格に恵まれたスポーツ好きの子供であった。ハイスクールでは、すっかりアメリカン・フットボールのとりこになり、無断で承諾書に親のサインをまねていれ、放課後行くはずの日本語学校もさぼって、フットボールに入れ上げる。ついにフットボールをしていることが、日本語学校の成績表を妹が持って帰ったのに、自分が持ち帰らなかったことから発覚して、父親にひどく怒られるが、シーズンオフに日本語学校に行くことと、日本の国技柔道にこれまで以上に身を入れることでやっと許しを得る。彼はブロードウェー・ハイスクールのフットボールの花形選手になり、柔道は三段にまで昇り彼の通う道場では無敵の強さを誇る。フットボールではシヤトルの高校選抜にいつも選ばれ、オレゴン州のウイラメット大学は奨学金を出すから入学してフットボールを続けるようにさそう。家庭ではホテル業である父母を助け風呂の掃除やシーツの取りかえなど手伝ったが、時には流行歌に耳を傾け、ダンスに興じ、女の子の噂話をするごくあたりまえの高校生であった。ただフットボールの花形として得意の絶頂にあった時、彼は父の急死に遭遇する。母の提案で、父の遺骨を父の郷里山口県

平生へ埋葬するため姉と妹と共に日本に向う。ジムの主目的は、三箇月の滞在期間中の大部分を講道館で過ごし、柔道の腕をみがくことにあった。納骨を終え、三船十段の空気投げに畳にはいながらも講道館で四段に昇進して帰国目前、アメリカと日本の通商関係がとだえて帰りの船が動かなくなってしまった。続いて第二次大戦の勃発である。しばらくは、二世である彼は平生に住み柳井商工の柔道教師をして戦争を見守っていられたが、健康で若いジムの周囲が見逃すはずはなかった。彼の生まれた時は、特に両親が申し入れしなければ、二世にはアメリカ国籍と日本国籍の両方が自動的に与えられることになっており、彼は日本国籍も持っていたから、徴兵に応ずるのには問題がなかった。彼は中国に送られ2344槍部隊に配属され、漢陽を基地に砲兵として周辺を転戦する。ジムは運動神経抜群で体力もあり兵士としては優秀だったが、なれぬ日本語に困った。軍人勅諭が覚えられなくて、そのため何度もなぐられる。その他何かにつけても彼を目のかたきにして痛めつける軍曹がいた。ジムの辛い日本の軍隊生活をささえたのは、戦争が終わったら地の果てまででも追いかけて、このキドという名の軍曹を打ちのめしたいということだった。だから、キド軍曹が、実はハワイ出身の二世であり、彼の父がジムの父と同じ平生の出身だと、たまたま本部にまとめられている身上調書の整理を命じられて知った時、ジムの驚きは大きい。その時キドはすでに日本に帰還した後であった。ジムはそのうちひどいマラリアと脚気を煩い、漢口の陸軍病院からさらに上海の陸軍病院へ転送され、ここで奇跡的に命を取り止める。病院経営に当たっていた一人の大尉から、英語ができるのを見込まれて、軍属に身分を変更して通訳として終戦を向かえる。

戦後は、山口に駐留したニュージーランド軍及後に米軍の通訳兼資材調達係になるが、平生へ帰っていたキドが、妹ベターと結婚することになる。二世のジムを他の古参兵の暴力から守るために、先手を打ってキドがあ

ようにひどく自分を扱ったのだらうと考えるようになっていたジムは、この結婚を認める。彼も同じ職場の二世と結婚する。彼のそれからの人生は、日本軍に入隊したことによって失われたアメリカ市民権を取り返すための戦いであった。彼はそのためには無給で法的にも認められないのに、朝鮮戦争にあえて志願し参加している。それ以後何度かの訴訟をアメリカ国家を相手どって起こし、やっと勝訴にこぎつけ、アメリカ市民権を回復して、現在ハワイで土建業のかたわら柔道の普及にも努めている。

二人の紹介に紙数をついやしたのは、とりもなおさず二人の運命が二世そのものもつ宿命を良く表わしているからである。

《一世と二世》

一世と二世とは、いいかえれば両者の親子関係ということになる。1900年から1924年に、20代から30代でアメリカに移住した一世と、その子供の二世であるから、世代の違いがはっきりしており、その間を埋める年齢層を持たない特殊な親子関係である。さらに両者の間には言葉と文化の違いがある。一世は仕事上やむをえない時以外は日本語で通し、ほぼ同じ地域に自分達の社会を作り、準政府的な日本人協会が県人会を縦糸に一世の結束をはかっている。仕事のつながりでは商工会議所もある。この社会の中では、大きな価値観の変換をせまられることもなく、日本人として生きてゆける。ところが二世が話す言葉は英語であり、知っている音楽はアメリカのポピュラー・ソングばかりで、彼等の英雄といえば当時のジョー・ディマジオやクラーク・ゲーブルやキャサリン・ヘップバーンであり、全くの異文化の中に住んでいる。さらに一世は法的にアメリカ人として認められないが、二世はれっきとしたアメリカ市民である。このような食い違いのある親子関係とは、どのようなものだったろうか。ジム・ヨシダは、次のように述べている。

The Yoshidas were a close-knit family. My parents worked hard—the life of Oriental immigrants on the West Coast was never easy—and they impressed on us the need for industry, honesty, and respect for others, particularly one's elders.

さらに父については、彼の外見を述べたあとで、次のようにいっている。

I could never seem to penetrate my father's gruff exterior and I feared him as much as I loved him. I can't ever remember hearing him praise me. Whenever I did anything well, he simply said he expected me to do better next time, and eventually I came to understand that this was his way.

母については、優しい人で一度もたたかれたことがなく、彼が悪いことをしてもじゅんじゅんと説いて聞かせる人だったと述べた後で、次のようにいっている。

Mother had an understanding of young people that was extremely unusual in the Japanese immigrant generation. Dad was strict and stern. He wanted to rear his children the way he had been brought up. Mother was wise enough to know that American children could not be reared like Japanese children, that we were products of the new world and we required freedom. Eventually I came to realize she was a mellowing, liberalizing influence on my father.

ジムも上に述べているように、彼の母親のような存在は数が少なく、一世と二世の間には彼と父のようにれきぜんとした考え方の相違が存在したはずである。ただその様な相違は、我々が考えるほど両者が生活して行く上で大きな障害にはならなかった。ジムは「自分の家族はしっかりと結ばれていた」というが、アメリカで移民の一家として生計を立てていくのには、家族一体となって働かなければならなかった。ジムもモニカも自分の両親の勤勉さには心を打たれている。彼等も負けずに、父の経営するホテルや家庭での雑用を手伝った。そこには世代の相違をこえた一体感が存在した。

さらには二世は同じ二世の友達と過ごす時以外は、白人の家庭に受け入

れられなかったから、いきおい親と一緒に過ごす時間が長かった。モニカはジャンケンポンに始まって百人一首まで家族で楽しんだ。シヤトルの日本人社会では、皆一同に会して天長節を祝い、ひな祭、端午の節句、お盆、正月も同様に祝ったので、二世は何かと日本的なものに理解を深めることが多かった。彼らは、家庭と日系人社会を通して、わずかつづでも一世の持つ文化を理解することで、一世への理解に近づいたであろう。他の国からの移民の二世に比べて、日系二世の方がはるかに親や日系人社会の影響を強く受けている。逆に一世も、いやでも二世を通して押しよせてくるアメリカの文化を全く無視して生活することはできなかっただろう。それに反発して、ますますかたくなに日本的なものを主張する一世もいただろうが、逆に二世の立場に立って、それを理解しようと、いやせざるを得なかった一世の方が多かったろう。ジムの父母は、後にはあれだけジムがプレーすることに反対したフットボールの大ファンになる。モニカの母はモニカの入っているミッキー・マウス・クラブのパーティーへ恐る恐る出席して、よく関係者の英語が理解できないままに領事夫人にされて、事もなく大満悦で帰ってくる。英語のあまりよくできない一世は、自分達が時として二世の負担になることも承知していたろう。一世と二世の間に仲介する世代もなく、お互い日本語と英語のやり取りであっても、その新天地で生きて行かなければならないという絶対条件のもとでは、両者の溝は極力埋められなければならないものだった。そこには、言葉を越えた強い心と心の結びつきで、手に手を取りあって生きていく一世と二世の独特な親子関係が見られる。

《二世と日系人社会》

親子関係の枠をもう一つ広げると、そこには二世と日系人社会との出会いがある。アメリカ人である二世がまず素直に奇異に感じるのは、一世達

の不必要なまでの丁重さであり、どうして守らなければならないのかよくわからない行儀作法であり、日系人同志が会えば暗黙のうちに求められる遠慮であった。モニカは、母と友人のカトウ夫人が市街電車に乗り込むのに先をゆずりあって、運転手や後に並んで待つ乗客達をいらいらさせたことをコミカルに書いている。子供の時窮屈に感じられた行儀作法として、モニカは「歯を見せて笑ってはいけない」「学校で本をちゃんと両手でささえて読まなければならない」「おじぎは深々としなくてはならない」などいろいろあげている。遠慮をしなければならなかった思い出として、年始廻りに行った松井家で、松井夫人が食物を重箱から取りわけてくれるまで、自分の方では食べたいのに「けっこうです」といっていなければならなかったことなどあげている。モニカはこのようなことを思い出として語っているので、批判的に述べているのではない。ただそのようなことの背後にひそむ権威主義や形式主義には反発を感じていた。日本語学校のオオハシ校長は、何故いつもそんなに怒ってばかりいるのかわからない。この校長お気に入りのゲンジ・ヤマダ（あだ名kibei）は、日本で一時期育ったこともあり、直立不動の姿勢で「はい、はい」と答える。が、そのような謹厳な態度は、目下のものはたちまち見下してしまうような尊大で偏狭な態度の裏返しだったので、日本語学校の仲間からは嫌われ者だった。オオハシ校長の二世に対する態度は、彼が日系人社会から教育者として非常に信頼が厚かったことからわかるように、一部日系社会有力者——第二次大戦では、アメリカにあって日本の勝利を願った人達のグループ——が二世に対してとる態度でもあった。こういった人達に対して二世は、オオハシ校長に対するようにおびえたであろう。そのおびえをモニカは、次のように述べる。

Whenever Mr. Ohashi approached us, we froze in our seats. Instead of snapping into attention like Genji, we wilted and sagged.

Mr. Ohashi said we were more like "Konyaku," a colorless, gelatinous Japanese food. If a boy fidgeted too nervously under Mr. Ohashi's stare, a vivid red stain rose from the back of Mr. Ohashi's neck until it reached his temple and then there was a sharp explosion like the crack of a whip. "Keo-tsuke! Attention!" It made us all leap in our seats, each one of us feeling terribly guilty for being such an inadequate Japanese.

このような一部の有力な一世の態度は、二世が長ずるにおよんで、その反発をかった。丁寧さも行儀作法も遠慮も、日本という国がそれを生み出した文化的背景の上において始めて意味をなすものである。たとえ日系人社会があるにしろ、全く異なる文化的背景に育った二世に、その形だけもってきて強要しても、どうしても無理が起る。その無理をとけ合わせることが親と子として気持を通じあえる場ではなり立つが、公の場ではどうしても一方的押しつけになり勝て、二世は身の置き所もなくなってしまふ。二世は概して、日系人社会の主催する日本の祝祭日の式典に出席するのを気嫌いした。又自宅で祝うお正月は楽しくても、年始まわりは、気の張る退屈なものとして気が進まなかった。家庭では自分達には申し分のない父母であっても、一たん公の場で他の一世と同席するとたちまち人柄が変わって、我が子の一挙手一投足に文句をつけ、いかに自分達が日本の礼儀作法に敏感であるか相手に示そうとばかりする。総じて二世の日系社会に対する反応は“窮屈で味けないもの”であった。それだけに彼等に大きな意味を持ってくるのは友達である。ほんとうに分りあえるのは、立場を同じくする他の二世の友達だけだった。モニカもジムも、この手記でいちいち多くの友達の名前を上げ、一緒に何をして遊びどんなことで意気投合したかこと細かに述べているのは、日系人社会で二世にとって友達の持つ比重がどんなに大きいものかを示している。

《二世とアメリカ》

前章で、二世と日系人社会の結びつきを述べたが、それではもう一つ輪を広げて二世とアメリカ人社会のふれ合いはどんなものであったろうか。小学校、ハイスクールを通して学校では白人の子供と同席しても、排日感情の強い西海岸では、当時白人の遊び友達を持ちその家に入出入りすることは二世には例外的にしか起り得なかった。モニカが白人と寝食を共にするようになるのは、前にも述べたように、ビジネス・カレッジを終えて肺結核にかかりノース・パインズのサナトリウムに収容されてからである。ジムにとって、そのような機会は、皮肉にもアメリカ本土ではなくて、第二次大戦後小倉の米軍師団の通訳となり、個人的に志願して朝鮮戦争に従軍してからであろう。

モニカはハイスクール時代に白人の子供達と自分達二世の態度に相違があるのに気づき始めた。小学校、日本語学校を通して受け身の勉強に終始し、聞かれたことに答えれば良かったが、ハイスクールではことごとに自分の意見を求められるようになった。自分に意見がないわけではないが、何かをそれを押えて飲み込ませてしまい、いつももどかしい感じでいなければならなかった。白人の子達の言うことが、いつも的を射ているとか意味が深いとか決してないのだが、自分達の意見がちゅうちょなく話せるのをうらやましいと思う。他の二世達もモニカ同様、的確に意見が述べられない。自分達はアメリカ人だと信じて疑わなかった二世達も、やはり自分達は白人達とどこか違うと感じないわけにはゆかない。ただ、クラスでの討論とか学校での白人達のふれあいとは比較的形式的なものに終りやすいだけに、自己反省の材料としては不十分である。モニカが、本当に自分はどこまでも日系アメリカ人であって、いわゆるアメリカ人ではないと感じるのは、サナトリウムで他の三人のアメリカ人女性と寝食を共にして療養

するようになってからである。肺結核は当時は死亡率の高い病気であった。モニカは、当時の日本人が肺結核に対して持つ印象を持って入院した——自分を待つのは死であると。ところが他の三人は誰れも死ぬとは考えていないで、陽気に自分達をはげましながら闘病にはげんでいる。むしろモニカにとって隠さなければならないと思っていた自分達の病状が、立派な話題になりお互いの慰めや励ましになるのに、彼女は驚く。同室の一人ワンダは言葉使いが荒く、病院の規則などにことごとく挑戦的だが、自分をさらけ出して真正面から物にぶつかって行く姿勢に、モニカは驚きと大きな魅力を感じる。クリスの冗談にも目を見張るものがあった。モニカは父母に対して家庭で十分英語を駆使できる状態ではなかった。クリスに冗談をいわれてみて言葉を話すことがこんなにも楽しく、人間の想像力は何んと自由に駆けめぐるものかを感じる。彼女は入院当初は、周囲の華やかさに萎縮して自信を失うこともあったろうが、日を経るにつれて氷がとけるように周囲に同化していったようである。ここでも、他の二世患者達が極力人目をさけて周囲との接触をできるだけさけている姿を目撃する。自分も、同室のクリスから紹介された友達に対して、二世が目上の人達に対するように、笑顔で聞き手にまわって、相手からモニカがその人に好意を感じないのではないかと誤解されもする。このような経験を通して、いやでも自分が日系アメリカ人だと思い知らされる。しかしそれにもまして重要なことは、モニカがまるであかるい日ざしの中に入ったように自由を謳歌して生き生きと生活を始めることである。モニカの中にあったアメリカ的要素が、このような環境でいっぺんに開花して、きゅうくつな日系人社会に再び身を投ずることに彼女は気が進まない程になっていた。実際モニカは退院できることになった時、うれしさが半分と、まだサナトリウムにいたい気持が半分と五分五分だったと述べている。

ジム・ヨシダは第二次大戦中、大日本帝国陸軍の一兵士として中支を転

戦した。そして朝鮮戦争には、米軍のM. P. 指揮官の通訳兼運転手として参戦している。モニカはシヤトルの日系人社会育ちの二世としてアメリカ社会にふれたが、ジムは日本軍を体験した二世として、小倉の通訳時代も含めてアメリカ軍というアメリカ社会にふれた。したがってジムのアメリカ社会に接した印象は、いきおい日本軍とアメリカ軍の比較にならざるをえない。ジムはそれを次のようにまとめている。

These days in Taegu gave me an opportunity to compare the differences between the Japanese and American Armies. After battles in China, we would return to our barracks in Yoyang and face the almost sadistic hazing of noncoms. If their purpose was to make barracks life so miserable that we preferred combat, they succeeded. In the U. S. Army time away from line duty was a time for rest and relaxation. The G. I.'s would sit around shooting the breeze, write home, read comics, pitch horseshoes, play cards, shoot craps, wash and clean up oil weapons, or sleep. The American system appeared undisciplined, and yet I knew that at a moment's notice they could swing into action. It might be said that American industrial power won World War II, but that war also proved that no nation has better infantry soldiers than the United States. The easygoing American system had overwhelmed the harsh discipline of the Japanese system. It was, to my way of thinking, a triumph of the human spirit even in the inhumanity of war.

ジムの引きだした結論にはにわかには承服しがたいものがある。ただここで注目したいのは、ジムのアメリカ軍のもつ自由なくつろいだ雰囲気への賛美である。ジムは郷里シヤトルに何としてでも帰りたく、失われたアメリカ市民権を取り返すために参戦した。無理に上司に頼み込んで、G. I.の仲間入りをしただけに、アメリカ人に立ちもどった感激はひとしおだったろう。したがってどうしてもアメリカ的なものを賛美する傾向はいない。だが鉄かぶとの上に座って食事し、ジムに腕相撲をいどんでくるG. I.達の中に、彼は限らない親しみとくつろぎをおぼえる。彼は、その

中であって、本当に充実して生きていると感じられる。軍隊とサナトリュームの違いはあるが、この生活の中の充実感はジムとモニカに共通のものであったはずである。その充実感とは、しきたりにとらわれないより大きな自由の享受であったろう。

日系人社会は日本文化の背景を持った移民達をアメリカ社会の中で保護し、相互の利害を調整していくには有効な組織であった。二世もその組織に守られて、教育も受け自分達の友情をはぐくみ娯楽も楽しめた。その意味で二世は特に意識はしなくても日系人社会、特に両親に対する感謝の気持は強い。しかし、それとは別に彼等はアメリカ人として学校教育を受けアメリカ的な娯楽の中で育てているから、一世に比べてアメリカ的指向が強いのは当然である。日系人として特に排斥されないかぎり、彼等はアメリカ文化の中でのびのびと泳ぎまわることができた。二世の目から見た白人の社会は大きさにいえば“エデンの園”にも似た楽園であったろう。それが人種差別によって入りにくい社会であれば、そこで味わえる自由は“禁断の木の実”にも似た味がしたことであろう。一世の勤勉によって物質的にはあるレベルのアメリカ的生活が保証された二世にとって、彼等にとっては形骸化して何の意味も持たなくなっている日本的しきたりを押しつけられることのないアメリカ社会の“精神的自由”が特に何よりも魅力だったろう。

《二世と第二次世界大戦》

二世が何かと語られるのは、我々日本人の目から見れば、同じ日本人の両親から生まれながらたまたまアメリカにいたばかりに、日本の真珠湾攻撃に対するアメリカ人の憎しみを一身に引き受けなければならなかったからであり、アメリカ人の目から見れば、日本人の両親から生まれたばかりに、アメリカ人でありながら国家への忠誠を疑がわれて、キャンプに強制

収容されなければならなかったからである。二世の男子はさらに、アメリカ国家によってこのような扱いを受けながら、アメリカへの忠誠心を示すために後には参戦してゆかなければならなかった。もし第二次大戦が勃発しなかったならば、二世達はアメリカの片隅で彼等の生計を静かに営んでおり、とりたてて悲劇の主人公として話題にのぼることもなかったであろう。二世と第二次大戦とは切っても切れない縁がある。

日米関係が悪化し日本人排斥運動が厳しくなるにつれて、日系人社会でも、日本がなんとかアメリカとの関係を正常化してくれることを願う穏健派と、日本の軍部の動きを支持する過激派とに分かれた。そのような意見の食い違いは、たとえば、息子がアメリカの大学を出たが、アメリカ社会では頭脳労働者として受け入れられず、日本の会社に採用されて日本に行く場合、その賛否をめぐって意見が分かれるようなことに現れた。ただ、真珠湾攻撃の日まで、日米関係に関する一世間の意見の違いはあっても、外的には特に大きな変化はなかった。もちろん日本製品不買運動や日系人商店利用自粛運動や、日系人企業で働いていた中国人労働者の日本の中国侵略に対する抗議退職などあいついだが、シヤトルの日系人企業や商店を利用する人達は、主としてスキドローの住人で、このような呼びかけの外側にいる人達だったから、こうむる経済的被害は比較的少なくて済んだ。だが日系人が、学校や商店や通りで悪態をつかれ、いやがらせをされることは多かった。このような状態ですぐに開戦を迎えた。受けとめ方は各人各様だったろう。モニカの母は「困ったね。困ったね。」と言ったそうである。特に日本の軍部を支持する人達を除いて、一世も二世もただただ困惑したのではあるまいか。このような時点で、大局的に時局がどうなっていくかをはっきり見通して行動できる人は誰もいない。一世も二世も、アメリカが彼等にどう対処してくるか待つよりしかたがなかった。ジム・ヨシダはこの知らせを、12月7日土曜日一日早く母の郷里の山口県の小島に

ある上関で聞き、アメリカへの帰国の途を完全にとざされて悲嘆にくれている。

第二次大戦開始直後シヤトルの日系人が受けた直接的打撃は、その社会の主だった人々のF. B. Iによる逮捕と日系人の銀行預金の封鎖であった。その間日本軍の空襲にそなえ燈火管制がしかれる。モニカは日系人の逮捕のわくが段々広がって、父がその日の仕事を終って戸口に立つと、家族がどんなに救われた気分になったかを述べている。又F. B. Iによる家宅搜索が、日本語で書かれた文書や日本にゆかりのある物品全部を対象にするを知って、それらを処分したことも述べている。そのうち日系人は二世も含めて全員拘留されると噂さが立ち、それは本当になる。大統領命令 No. 9066号によって軍事要地からの日系人の強制撤去が認められ、シヤトルの日系人全員のキャンプ行きが決まる。ハワイは同じ軍事要地でありながら、諸産業が日系人の労働力に依存していたため、経済団体が強力に反対して、日系人の強制収容は成立しなかった。鉄条網にかこわれたキャンプで、家族全員が一間で暮らす生活は快適とはほど遠いものだが、各人工夫して少しでも自分たちの暮らしが快適になるように部屋の内部を改造したり、家具や柵を作ったりしている。日本の生活の知恵も生かされ、仮キャンプの立てられたパヤラップでは、土地がぬかることが多かったのでぬれてもよい下駄が大流行し、インデアナ州ミニドカの本キャンプでは夏のきびしい暑さにゆかたが大流行している。老人や主婦や子供を除いて、働ける者は皆キャンプの維持のために働いた。本キャンプには管理事務所と病院はもとともあったが、収容された日系人の手で、さらにそこに学校が組織され小さな図書館もできた。日系人の移民として自分達の社会を作って来た経験が役立ったのであろう。娯楽といえば、休日屋外でのレコード・コンサート位のものであった。外部との接触は比較的自由に、欲しい物を届けてもらうこともできたが、戦局が進むにつれて益々自由さの度合は増していっ

た。そしてやがて一世と二世の別れの日が来る。暗黙の内に二世をキャンプに収容したことの否を認め、改めて彼等のアメリカ市民権を確認し、アメリカ市民として戦時下のアメリカに協力を要請するルーズベルト大統領の呼びかけに応じて、その御都合主義に矛盾を感じながらも、大多数の二世の男子は二世部隊を組織し参戦して行った。1943年には、アメリカ市民権をもつ二世には、F. B. I が認める身元引受人とつすべき仕事があれば、永久にキャンプから出てよいことになった。その資格のない一世はキャンプに残らざるを得なかったが、身体的理由で兵役を免除された二世の男子や、二世の女子はいろいろ縁故を頼って東部へ中西部へと進出して行った。モニカもその波に乗ってキャンプを去った一人である。

やはりキャンプに強制収容されることになって、二世に一番大きな衝撃を与えたのは、彼等はもはやアメリカ人としては扱ってもらえないということだったろう。彼等はアメリカの理想である人種や先祖を問わない平等社会は、空念仏にすぎないと感じたことだろう。それは彼等の中で怒りと恐れを両方呼び起こした。怒りは、特にもうアメリカ人でないとしたはずの彼等に、アメリカ市民権を再確認することで、徴兵にかりたてようとしたことから起こった。彼等のうちでそれでもなお徴兵を拒否し投獄されたノー・ノー・ボーイ達は、その怒りの代表である。恐れは、こうなるとアメリカで受け入れられず、さりとて日本ではもっと受け入れてもらえるはずもない、彼らの国籍不明の“宿なし的”不安であった。だからこそ彼等は1943年以後身元引受人があると、一刻も早くアメリカ社会に受け入れられようとして、飛ぶように東部へ中西部へと散って行った。ただ身元引受人を頼って二世が各地へ散ったのは、何も自分達の身分を隠すことばかりを意図していたのではない。ある二世が部隊を組んで、戦線の活躍で彼等をアメリカ人として広く印象づけようとしたように、残った二世も自分の能力を発揮してアメリカ社会に貢献することで、彼等がはっきりアメ

リカ人であることを印象づけようとした。キャンプ生活はその程度の口惜しさを彼等にあたえていたはずである。ジム・ヨシダの場合ももっと悲惨である。ジムが仮に日本兵と戦っても皮ふの色を同じくした異国人と戦うことにすぎない。だが日本軍に入隊させられて、アメリカ人と戦えば同国人と戦うことになる。事実彼は兄弟同様の友達やフットボール仲間にもし戦場で会ったらどうしようと悩む。自分は彼等とわかっていながら銃をうつだろうか、それとも彼等が先に自分を銃でうつだろうか。ジムは彼等にあつたら絶対に銃をうつまいと、いつも心にいい聞かせている。だが仮にジムがアメリカ人としての信念で、自分はどうなっても母国に銃をとらなかつたとしても、日本にいる彼の母や妹や、父母の親戚はそのためどうなつたであろうか。彼がもし入隊して配属された漢陽の守備隊で、ことごとく彼になんくせをつけていじめる古参兵の下士官をなぐりつけたらどうなつたであろうか。さらに命じられた捕虜の銃剣での刺殺を、彼が拒否していたらどうなつたであろうか。又討伐途上で、あまりの重さにたえかねて、運んでいる連隊砲の一部を彼がほうり投げたらどうなつたであろうか。ジムは皆これらの事に耐えて生き抜かなければならなかつた。与えられた条件に無条件に従って耐えて行かねばならなかつた状況は、ジムにもミニドカのキャンプに収容された一世や二世達にも同じことだつた。それにしても耐えることがいつまで続くのか見通しも立たない状況は、ジムもキャンプの人達も絶望的にさせたろう。しかしどのように追い込まれた状況になつても、人間は何かを頼って生きようとする。ジムは、いつの日か古参兵を打ちのめすという異常な目的すらも心の支えに変えて、日本の軍隊生活を生きのびる。ミニドカのキャンプの人達は、いつはてるともない絶望を強じんなバネに変えて、あたえられた条件の中で何か少しでも良いものを作り出そうとして、ミニドカのキャンプをたちまちシヤトルの日系人社会のように変えてしまう。

そして、二世達にこれだけの苦勞を強いて、やっと第二次大戦が終る。ジム・ヨシダにも二世にも救いと共に心にぽっかりあいた虚脱感が残ったであろう。世界中にこれだけ大きな惨劇が起っても、誰もその中で一体自分は何のためにどんな役割をはたしたのか何も解らないのだ。このような二世の感じた虚脱感をジョン・オカダ（前出）はその傑作ノー・ノー・ボーイの中で、二世ケンジに次のように語らせているが、第二次大戦が終った時点での二世の気持を良く表わしている。

“He was up on the roof of the barn and I shot him, killed him. He wasn't the only German I killed, but I remember him. I see him rolling down the roof. I see him all the time now and that's why I want this other place to have only people because if I'm still a Jap there and this guy's still a German I'll have to shoot him again and I don't want to have to do that. Then maybe there is no someplace else. Maybe dying is it. The finish. The end. Nothing. I'd like that too. Better an absolute nothing than half a meaning. The living have it tough. It's like a coat rack without pegs, only you think there are. Hang it up, drop, pick it up, hang it agan, drop again……”.

《二世の帰属》

もし第二次大戦が二世にとって何かプラスするところがあったとすれば、それは本来アメリカ人である二世を、一世の組織する独自の閉鎖的社会からとき放して、二世が帰属すべきアメリカ社会への復帰を早めたことであろう。もちろんこれはあくまで第二次大戦の思いがけぬ副産物として起ったことである。二世の日系社会に対してよりも、アメリカ社会に対して示すより強い指向性についてはすでに述べた。日系人社会は、排日的感情の強い西海岸にあって、アメリカ市民権を持たぬ一世が、自分達の利害を守るために作りあげた組織であった。したがって日系人の社会は、あくまで一世のための社会であって、その恩恵に浴しても二世のためのものではな

かった。二世はいずれは“日本人の育てたアメリカ人”として、より広いアメリカ社会にとけ込んでいく運命にあった。たまたま第二次大戦の勃発により、キャンプに強制収容されたことで、一世の二世に対する拘束力が弱まり、二世のアメリカ社会への復帰を速めた。キャンプを去ったモニカもその友達も、東部での暮らしがいかにも夢のように素晴らしいものであるかを、キャンプの両親達に熱烈に書き送っている。そのようなアメリカの自由な暮らしを一部で体験し一部でかい間見ているジムは、戦後の日本での経済的には恵まれた暮らしを捨ててもアメリカに帰属したくて、失った市民権の回復に狂奔する。二人共悲劇的な体験を経た後だけにアメリカ社会への指向が強いのはいたし方ないとしても、二人にはそれを越えて、たとえ人種差別を受けようとも、“アメリカ以外どこにもほかに住む場所はない”という気持は決定的である。ただし、二人はそれ程アメリカ人なのであろう。

モニカは、一世が二世と違っている程、二世も白系アメリカ人とは違っていることはよくわかっていた。同時に、その差がいつも誤解され不利に働くものでなく、偏見でもって無条件に排斥されないかぎりには、ユニークなものとしてむしろ歓迎されることにも気づいていた。サナトリウムで療養中、モニカは病室を移った人気者のクリスから日系人的心遣いを買われて最も心の休まる相手として、多くの同室希望者の中からルーム・メイトとして選ばれた経験を持っている。モニカはキャンプを出て二年後、クリスマスを父母と過ごすためにキャンプを再び訪れた時、母が「自分達両親が日本人であったばかりに、本当にお前達には気の毒なことをした」といったのに対して、次のように答えるほどに、日系アメリカ人として誇りを持つようになっている。

“No, don't say those things, Mama, please. If only you knew how much I have changed about being a Nisei. It wasn't such a tragedy. I

don't resent my Japanese blood any more. I am proud of it, in fact, because of you and the Issei who've struggled so much for us. It's really nice to be born into two cultures, like getting a real bargain in life, two for the price of one. The hardest part, I guess is the growing up, but after that, it can be interesting and stimulating. I used to feel like a two-headed monstrosity, but now I find that two heads are better than one.”

シカゴでもモニカは、その髪や皮膚の色の違いも、思考様式の違いも、相手に偏見がなければ、むしろ相手から新鮮な感動で受けとめられることを経験する。自分がそこにしっかり根をおろして生活でき、周囲もそれを認めてくれるという安定感の中では、今までモニカの中で劣等感にしかつながらなかった日系人的思考様式が、他の周辺の人にはもてない独自の思考様式として、それを持つ自己への自信につながってゆく。実際二世全体にとってもアメリカ人としての定着があって始めて、自分の中にある日本的なものを憎んだり邪魔物扱いにしたりせず、アメリカ人にはない資産として見ることができる。アメリカ社会に帰属するにあたって、この生活の安定が保証されることこそは彼等に絶対必要なものである。そしてこの安定は、彼等を特別視しないで、一介のアメリカ人として扱うことのみから生まれる。もともと二世、二世と、何かにつけて彼等が引き合いに出されるのは、彼等が第二次大戦の悲劇の主人公だったからである。してみれば一番そっとして静かに暮らさせてほしいのも彼等二世であろう。

※ ジム・ヨシダの '*The Two Worlds of Jim Yoshida*' は、彼の体験談をもとに、練達の新聞記者ビル・ホソカワが書きおろしたものであることを附記しておきたい。